



## 山川さんから託されたバトン

はるか昔のことです。英語教師になって6年目、和光中に赴任して3年目の年に、半年間の語学研修のためアメリカへ派遣されました。その間、大学で勉強をしながら現地の小・中学校、そして高校で授業をする機会に恵まれました。

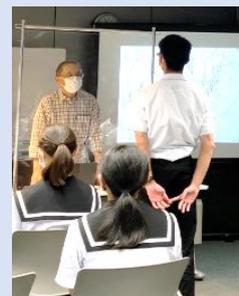
ある日、高校の授業で「日本について質問は？」と尋ねた瞬間、一人の男子生徒が手を挙げて、「第二次世界大戦の日本軍による『真珠湾奇襲攻撃』を生徒にどのように教えているのか？」と吐き捨てるように言いました。まるで「宣戦布告無しに『だまし討ち』をした卑怯者」とでも言わんばかりの目で。それを聞いた瞬間、考えるよりも先に怒りが込み上げてきて、心の声が「日本に原子爆弾を落として20万を超える人間を焼き殺したのではないか、今も病<sup>やまい</sup>に苦しむ人が大勢いるのに何を言っているんだ！」と叫んでいました。それでもなんとか言葉を飲み込んで、彼の目を見ながら「社会科の教師ではないのでいい加減なことは言えない。ただ、罪のない一般市民の命を奪う戦争に、そもそも正義などあるのだろうか。教えてほしい。」と返答しました。その後帰りのバスの中で「あの生徒、大切な家族が真珠湾で命を落としたのだろうか。戦争は終わってないんだなあ。」とぼんやり考えていたのを今も覚えています。

先日の修学旅行で、私たちは長崎で被爆した山川剛さんから当時のお話を伺いました。1・2年生にもぜひ伝えたいので、山川さんのお言葉を紹介します。

・・・私が子どもだったころは「戦時下」でした。戦時下では、「貴様<sup>きさま</sup>の命など鳥の羽根一枚よりも軽い。お国のために命を落とすことは美德<sup>びとく</sup>（立派な行い）だ。」と教えられ、「俺は戦争はいやだ。この戦争、おかしくないか。」などと思ったことを口に出すと、一般人の身なりで紛れ込んでいる政府のスパイに捕まって、拷問を受け、ついには命を奪われていました。また、「アメリカ兵やイギリス兵は人間の顔をしているけれど、一皮むけば鬼。敵（＝鬼）に捕まるぐらいなら自ら死を選べ。」と教え込まれていたため、敵兵に追われた際、当時の親は、80mの崖から我が子を突き落とし、自分もその後を追って飛び降りて死んだのです。

長崎に原爆が落とされた1945年8月9日午前11時02分、爆心地から4.3kmのところ、8歳の私は家の近所の波止場でどろ団子を作って遊んでいました。そのどろ団子を地面に置いた瞬間、ピカーッと辺り全体が光に包まれました。熱くて仕方なかったけれど、何が起ったのかさっぱり分かりませんでした。〔軍の倉庫の見張り役が板壁に焼き付けられた写真を見せながら〕見てください。4km離れていたのに人間が焼け焦げたんです。恐ろしい「熱線」を浴びせかけられたんです。原爆投下から3日後、私は両親と姉の4人で夜通し暗闇の中を歩いて避難しました。何も見えない中を私は泣きながらついていきました。

・・・どうか皆さん、二度と被爆者を作らないでください。それが私の和光中の皆さんへのお願いです。今現在、世界には13,000発を超える核爆弾があります。たった一発も残すことなく「核兵器0(ゼロ)」にしてください。私は必ず実現できると信じています。世界の中には、軍を持つことをやめて、その代わりに軍人の数だけ学校の先生を作った中米の国コスタリカやアイスランドという国があります。軍を持ってはいるけれど200年以上戦争をしていないスイスやスウェーデンに学び、どうか戦争のない世界を作ってください。お願いします。



〔生徒代表からお礼の言葉〕

山川さんの思いをしっかりと胸に刻み、力を合わせて平和な世の中を作っていこうではありませんか。